

# NEXT CONCERTS

>> 次回東京定期演奏会

第 **776** 回

サントリーホール

プレートーク 山田 和樹氏

2025年**11月28日(金)**19:00開演 18:30~

**11月29日(土)**14:00開演 13:20~

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人日本芸術文化振興会

文化庁  
Agency for Cultural Affairs,  
Government of Japan

山田和樹が描く、  
色彩と祈りが織りなす世界

指揮:**山田 和樹**

バリトン:**加来 徹\***

ソプラノ:**熊木 夕菜\*\***

合唱:**東京音楽大学\*\*\***



©T. Tairadate



©GODA

ドビュッシー:パレエ音楽《遊戯》

武満徹:マイ・ウェイ・オブ・ライフ

—マイケル・ヴァイナーの追憶に—\*、\*\*\*

ラヴェル:ボレロ

プーランク:スターバト・マーテル\*\*、\*\*\*

1回券料金 S ¥10,000 A ¥9,000 B ¥7,500 C ¥6,000 P ¥合唱団 Ys (25歳以下) ¥2,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

©Zuzanna Spezial

## 次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

山田 和樹 編

きき手・文 青澤 隆明

### “うちのオケ”と、ふつうにはないプログラミングを

今年6月中旬、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の定期公演デビューで大きな成功をおさめ、国際的な名声をさらに高めた山田和樹。同月末からはバーミンガム市交響楽団を音楽監督として率いて日本ツアー。2026/2027シーズンからはベルリン・ドイツ交響楽団首席指揮者兼芸術監督に就任することも報じられた。

「指揮者稼業は一人ではできない。これまで積み重ねてきたこと、ぜんぶが繋がっている、そのおかげですよ。不思議なんですけど、僕はバーミンガムも“自分のオーケストラ”と言えるし、モナコも、横浜シンフォニエッタも東京混声合唱団も“自分の”って言えるけど、“うちのオケ”って言うときは日本フィルのことなんだよね、いまだにね。10年間正指揮者をやって、マーラー・チクルスとか、いろんなことをやってきて、いまタイトルはないんだけど、勝手に僕は一員だと思ってる」。

これほどまでに日本フィルに惹かれるのは、どのような思いからだろう?

「初めて自分がチケットを買って行った演奏会で感動を与えてくれて、ファンになって通いつめた。その頃もいまも、日本フィルの演奏会は、いつもなんかキラキラがある。演奏の特徴を言えば、集中したときに、音がぐわって寄る。空中浮遊感というか、わっと音楽が沸き立つというか、会場全体がぼわんって盛り上がる瞬間が必ずある。たとえばフォルテの音が1個あるとして、日本のオケはどこでも必ず合うんだけど、その合いがたがすごい合いがたをする。あの感覚は他にない、海外のオケにもない、日本フィル独自のものなんです。なんだろうね、“日本フィル魂”みたいなものかな? 僕も海外でさまざまな経験を積み、一年経って帰ってくると、日本フィルもつねに進化して、できることの幅が広がっていて、驚かされます」。

この秋、待望の再会は、フランスと日本の作品、そして合唱を含むレパートリー。山田和樹が当初から日本フィルと大切にしてきたプログラムだ。「音楽をやる意味のなかで、やっぱり僕は即物的に、唯物論的になりたくないと思う。そこにプラスアルファを生み出したいし、エーテル的なものを生み出したい。蒸留酒みたいに音楽が揮発されて、そこになにか香りが出るとか、燃えている温度であるとか、そういうものを感じたい。僕は音楽に色をみたいと思う。それがフランス音楽とそのエスプリと結びつくんですね。それと、日本フィルはいちばん数多く指揮しているのに、合唱つきの定期はひとつもなく、『それはやらなきゃね』という話になって。プーランクはできたら面白いし、武満さんの《マイ・ウェイ・オブ・ライフ》を今回初めて指揮することにしました。合唱の東京音楽大学も、ソリストお二人も共演するのは初めて。未来の余白が多い人たちとだから、すごく楽しみ」。

武満の前にはドビュッシーの《遊戯》、プーランクの《スターバト・マーテル》の前にはラヴェルの《ボレロ》を組み合わせるのがまた独特だ。奇しくも作曲家のレイト・ワークスばかりである。

「武満さんの音楽というのは、基本的に美しさで満たされている。やっぱり自然的なものと結びついているからで、それがもうこの作品には溢れている。プーランクって独特で、美しくもあり、すごくクレイジーでもある。対比が極端なんですよ。彼はクリスチャンを離れた時期があって、戻ってきたときの信心の強さがすごい。ロカマドゥーというところに行って、彼は黒い聖母像をみたんですね。プーランクの音楽にはいつも皮肉もあってユーモラスでもあるんだけど、単純に言う僕は『黒い天使、白い悪魔』って言い方ができると思う。ラヴェルの《ボレロ》も対比しかない。そして、くり返すことの恐怖。言わずと知れたこの名曲を後半の頭に置くプログラミングもふつうはないし、4曲のコントラストが良い作用を生めばと思います。カレーを辛くするには砂糖を入れる、スイカに塩を振るように」。

と言いつつ、どうしたって生と死を思わざるを得ない、深みのあるプログラムとなっている。「一見ばらばらなんですけど、通して聴いたら、なにかちょっと考えるところがあるかもしれませんよね。最終的な問いは、『われわれはどこから来てどこへ行くのか?』っていうことに尽きる」。では、その問いにご自身としてはどう答えますか? 「僕はなんかこう、結局それを考えるために生きてるのだと思う。まさしく、少しでもわかるためじゃないですか、『なんでここににいるのかな?』っていうのを」。